

東京語のゆれに関する研究

国広 哲弥 中本 正智 (研究員)

藤田 勝良 石井 龍治 (研究協力者)

篠崎 晃一 藤本 泉

藤原 敬治

昭和57年度から柴田武主査を中心とする文部省科学研究費の補助による特定研究「情報化社会における言語の標準化」の研究がはじまった。その中の一班、藤崎博也研究代表の組織する「日本語の標準化の基盤となるべき言語構造」の中で、国広哲弥と中本正智が「用字・用語法のゆれの言語学的分析とそれらの標準の設定」を分担することとなった。本論は、この研究成果の一部である。

明治以降の国語教育において、東京語は標準語もしくは共通語の基盤と考えられてきた。しかし、東京が周辺部へ膨張し、大都市化するにつれ、そのことばも複雑に多様化していくばかりである。東京語は多くの側面においてゆれているといわねばならない。

「ゆれ」とはどのようなものであろうか。これは言語学的な興味をそそる問題であるにもかかわらず、いまだ十分に研究されていない。

いわゆる「ゆれ」現象を起こさせる原因を考えてみると、

- (1) 言語の内部変化の過渡的すがたを示すもの
- (2) 周辺部などからの外的影響によるもの
- (3) 世代・性・職業の差によるもの
- (4) 場面や待遇の差によるもの
- (5) 新語や新表現の流行によるもの

などがあげられる。

これらをもても明らかなように、ゆれ現象は、言語学のあらゆる分野の研究対象となりうる問題を含んでいるとみられる。

東京語のゆれについて研究したものは、これまでけらして多くない。国立国語研究所の「語形確定のための基礎調査」(昭和30年)は、言語(国語)研究者を

中心に、国語教育、新聞放送関係、文芸芸能関係、その他各界人、合わせて300名を対象に、150項目について調査したものである。これは、ゆれの調査としては本格的なものであるが、調査対象者がことばにたずさわっている有識者に限られているのは問題だと考えられる。

文化庁の「ことばシリーズ」(1~9)『言葉に関する問答集』(昭和50年)は、ゆれ現象にあると思われる用字や用語を集めたもので、それぞれについての歴史的背景についてわかりやすく解説している。

最近の国立国語研究所報告70-1「大都市の言語生活」(昭和56年)は、東京や大阪などの大都市の言語生活を究明したものであるが、その中に「感ずる、感じる」、「見られる、見れる」など、ゆれ現象にあると考えられる語が含まれている。

従来、東京語のゆれの研究は、かならずしも十分であったとはいえない。とくに、一般人を対象にした研究は無きに等しいといつてよいであろう。

ゆれ現象が、一般大衆の中で起こっている現象である以上、一般人を対象にした調査を実施し、その成果をふまえて研究を進めるべきではないだろうか。

初年度においては、ゆれとみられる項目を集め、その中から、第1次調査のための167項目を選定した。その内訳は次の通りである。

語形	98	文法形式	11
漢字の読み	20	漢字の用法	32
慣用句の意味	6		

調査は、それぞれの項目について短文をつくり、その中で、ゆれと思われる複数の語形を示して、次の点について質問した。

- (a) どの語形を用いるか (b) 使用頻度

(c) 使用場面 (d) 語感 (e) 標準形の採否

調査は、主として東京及びその周辺部に居住している人を対象とし、性差や年齢差がみられるようにした。

調査は、面接調査によった。多量の調査であるため、研究協力者の助力を得た。

調査終了時の総数や性別、年齢別の数は次の通りである。

調査総数 205 男性 96 女性 109
 年齢(人数)15~22(43) 23~30(39) 31~42(41)
 43~57(41) 58~90(38)

調査結果は、電子計算機によって処理し、全項目について、次の4種類のグラフをえがいている。

- (a) 使用頻度の総合グラフ
- (b) 標準形採否のグラフ
- (c) 世代差を示す男女総合グラフ
- (d) 世代差を示す男女別グラフ

第2年度は、初年度の調査結果をふまえて、ゆれ現象をみるための調査項目を厳選し、次のような57項目にしぼって第2次調査のための項目を定め、調査を実施した。

語形 22 文法形式 9
 漢字の読み 8 漢字の用法 18

調査票は、初年度の調査を反省して、単純化してあるが、それぞれの項目について質問する内容は、ほぼ初年度と同じである。

調査は、東京及びその周辺部の居住者に限り、1,000余名を対象にし、初年度と同様、性差や年齢差がみられるように調査対象者のバランスを考慮している。

調査の総数が初年度のおよそ5倍であるため、アンケートによる調査を実施することにした。そして調査の片寄りをなくすため、次のようなさまざまな階層を対象に調査を進めた。

会社員 教員 区役所や都の職員 老人クラブ員
 高校生 大学生 中・高校生や大学生の家族 個人的知人など

調査は本年2月に終了し、分析にとりかかっている。詳しい報告は分析を終えたところで行なうとして、ここでは、初年度の第1次調査について、どのような条件でどのようなゆれがみられるのか、またゆれの型にはどのようなものがあるかなどについて述べることにしよう。

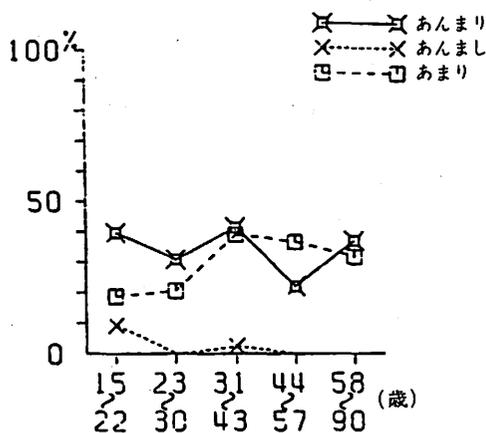
ゆれの差を示す条件にはどのようなものがあるだろうか。まず、言語的条件として、構文的条件、慣用的条件、語形的条件があげられる。

(1) 構文的条件

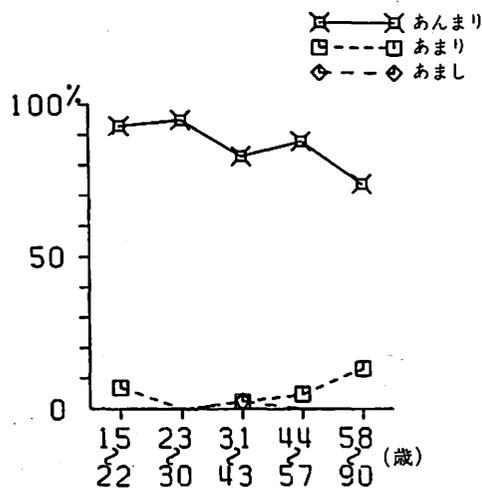
「あまり」は名詞としても、副詞としても用いられる語であるが、副詞で語形が「あんまり」となることもあって、「あまり」と「あんまり」がゆれ現象を示している。そのほかに「あまし」「あんまし」を開くこともある。

調査の結果は、「あまり」と「あんまり」がゆれていて、「あまし」や「あんまし」は予想したほどには使用されていないことが判明した。ただし、これは表面に現れた結果であって、実際の使用頻度はさらに多いと思われる。調査による使用意識をたずねる場面である

成績が**よくない。
 (使用=常に&よく; 性別=両方)



その仕打は**だ。
 (使用=常に&よく; 性別=両方)



ために、答えが少ないということなのかも知れない。

「あまり」と「あんまり」のゆれの度合は、すべての構文で同じでない。たとえば

- (1) 成績が あまり よくない。
- (2) 成績が あんまり よくない。

において、「あまり」と「あんまり」の使用勢力が同程度に伯仲している。これに対して、

- (3) その仕打は あまりだ。
- (4) その仕打は あんまりだ。

においては、「あんまり」の使用勢力が断然大きい。これは、ゆれ現象にある語が、すべての構文で同程度にゆれているのではなく、構文によってゆれの度合を異にしていることを示している。

「成績が ~ よくない」においては両語が伯仲しているのに、「その仕打は ~だ」においては、「あまり」より「あんまり」が使用頻度が高いということは、「あんまり」が強調的な表現として「あまり」から派生した語であり、「……は~だ」というとりたての表現において使われやすいということなのであろう。

このように構文的な条件が、ゆれの差に関与しているのである。

(2) 慣用的条件

漢語系サ変動詞の一段化はよく知られている現象である。たとえば、「感ず」が「感ずる」になり、一段化して「感じる」になるのであるが、今でもなお「感ずる」という語を用いることもあり、「感ずる」と「感じる」がゆれの現象にあると思われる。

たしかに調査してみると、「感ずる」と「感じる」が使われているのであるが、条件によって、ゆれの度合が異なっている。たとえば、

- (5) おかしいと 感ずる。
- (6) おかしいと 感じる。

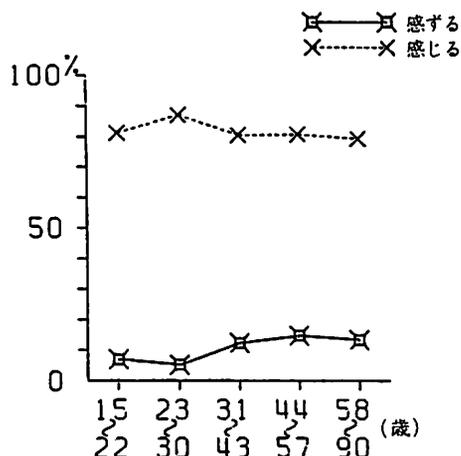
のような一般的な文脈においては、「感じる」の使用が「感ずる」より圧倒的に大きな勢力となっている。これは、すでにゆれ現象を脱して「感ずる」を廃し、「感じる」の使用が安定しているとみてよいだろう。これに対して、

- (7) 意気に 感ずる。
- (8) 意気に 感じる。

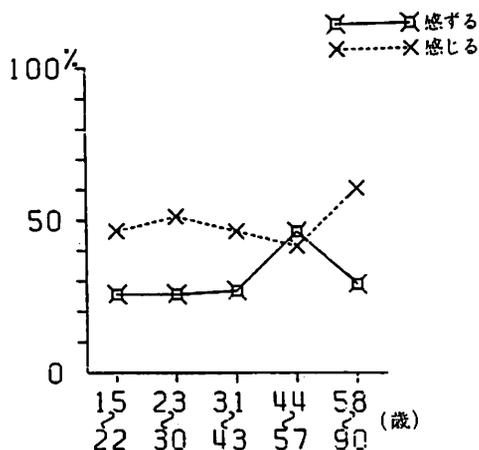
のような慣用的表現においては、「感じる」がやや優勢ではあるものの、「感ずる」の使用もまだ健在であり、「感ずる」と「感じる」がゆれ現象の中にあるとみられる。

これは、「感ずる」が「感じる」に変化する過渡的

おかしいと * *。
(使用=常に&よく; 性別=両方)



意気に * *。
(使用=常に&よく; 性別=両方)



なものとして、ゆれ現象を起こしているのであるが、慣用的な表現では一般的な文脈より、「感ずる」か「感じる」に変化する速度が遅く、より保守であることを示している。

これは、慣用的な条件が、ゆれの差に関与している例とみてよいであろう。

(3) 語形的条件

一段活用動詞の可能表現も、ゆれ現象を示している。たとえば、「見る」ならば、その可能表現が「見られる」であるけれど、五段活用動詞の可能動詞との類推によって新しく「見れる」が使われるようになって、「見られる」と「見れる」がゆれ現象にある。

ところが、同じ一段活用動詞の可能表現であっても、すべての動詞が同じゆれの度合を示しているわけではない。

たとえば、

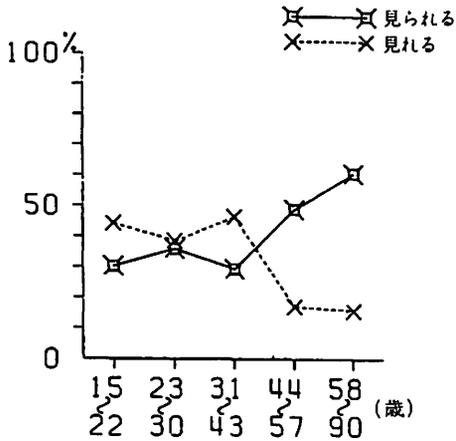
(9) ここから富士山が 見られる。

(10) ここから富士山が 見れる。

における「見られる」と「見れる」をみよう。高年層では「見られる」が圧倒的に多く使用され、「見れる」をはるかに上回っている。これに対し、中間層(22歳~43歳)や低年層(15歳~22歳)においては、「見れる」が「見られる」をやや上回っている。

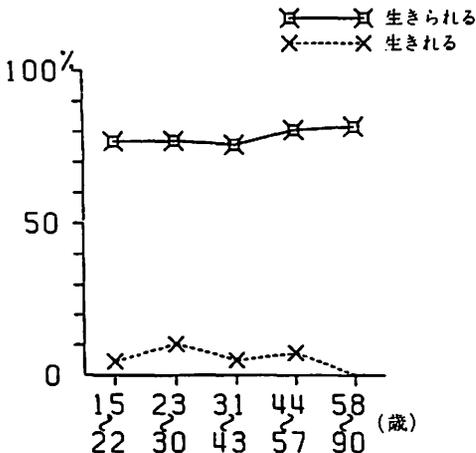
ここから富士山が * * 。

(使用=常に&よく;性別=両方)



鶴は千年, 亀は万年 * * 。

(使用=常に&よく;性別=両方)



ところが同じ一段活用動詞であっても、たとえば「生きる」のように、語幹音節が長い動詞においては、ゆ

れの度合が異なってくる。

(11) 鶴は千年, 亀は万年 生きられる。

(12) 鶴は千年, 亀は万年 生きれる。

においては、全世代ともに「生きられる」が圧倒的に多く、「生きれる」はごくわずかであることがわかる。

これは語幹音節の長短という語形的な条件が、ゆれの差に関与している例である。

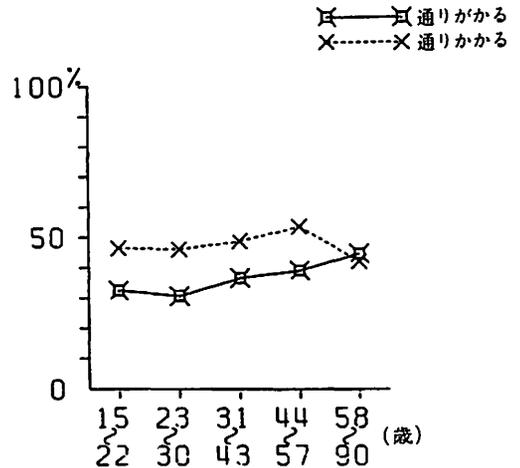
次に非言語的的条件として、世代、性、職業のちがいがあげられる。なかでも、世代のちがいがらくるゆれの差は顕著である。そこで世代層からみたゆれの型を示すことにしよう。

(1) 全世代型

すべての世代において同程度のゆれを示しているものがある。たとえば、

近くを * * ったので、.....

(使用=常に&よく;性別=両方)



(13) 近くを 通りがかったので お寄りしました。

(14) 近くを 通りかかったので お寄りしました。

において、「通りがかる」と「通りかかる」が全世代において、ほぼ同程度の使用を示している。このような型のゆれは、将来、どの語形に落ちつくのか予想が困難である。

(2) 高年層型

高年層において使用の勢力が伯仲し、ゆれているが、低年層になるにしたがって、その中の一つの語形に統一されていく傾向を示している型である。たとえば、

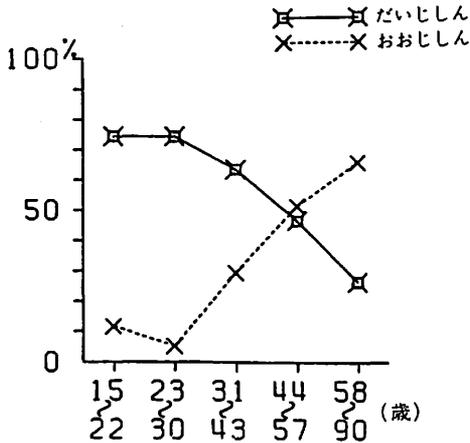
(15) だいじしん(大地震)が来たら この建物は ひとなまりもないね。

(16) おおじしん(大地震)が来たら この建物は
ひとたまりもないね。

において、「だいじしん」と「おおじしん」は、ゆれ現象にある。高年層では「おおじしん」の使用が多いのに、中間層から低年層にかけて、逆転して「だいじし

大地震

(使用=常に&よく;性別=両方)



ん」の使用が圧倒的に多くなっている。

このゆれは、「大」を表す和語の「おお」が字音語の「だい」にとりかわっていく過渡期のものとみられる。

(3) 中間層型

高年層と低年層の間に大きな使用の差があるため、中間層においては、その過渡的な段階として、ゆれ現象を起こしている場合がある。

たとえば、

(17) 先生に見つかると やばい。

(18) 先生に見つかると あぶない。

において、「やばい」と「あぶない」が対になっているが、そうでなくてもよく、「あぶない」のかわりに「いけない」などと対にしてもよかったのである。ここでは、「やばい」がどの程度使用されているかを見るのが大事なのである。

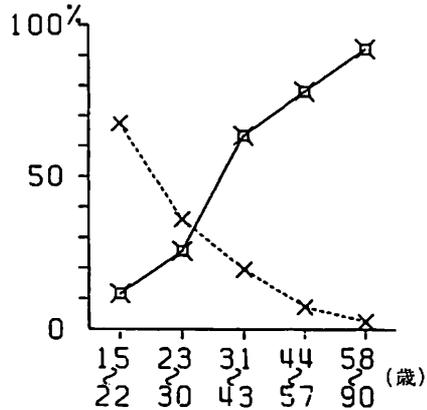
高年層では「やばい」はほとんど使われていないが、中間層、低年層になるにしたがって、「やばい」の使用が増大している。これに反比例して「あぶない」は高年層で多いのに、中間層、低年層になるにしたがって少なくなっている。中間層でゆれているとみられる。

『やばい』は、本来、隠語であった語が一般化したものである。「やば」(看守)が形容詞化した語といわ

先生に見つかると **。

(使用=常に&よく;性別=両方)

あぶない
やばい



れている。「やばい」は低年層で急激に一般化し、定着したものとみられ、高年層との間に大きなずれを生じており、中間層のゆれは過渡的なものとみることができる。

(4) 低年層型

ゆれているとみられる両語の使用が、高年層にあってはどちらかに勢力が傾いているのに、低年層にあっては、両語の使用が勢力的に伯仲しているような場合がある。たとえば、

(19) 仕事できる人は10人にも 足りない。

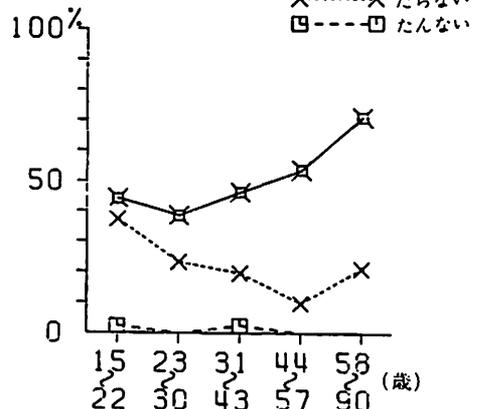
(20) 仕事できる人は10人にも 足りない。

において、「足りない」と「足りない」の使用をみる

仕事できる人は10人にも **。

(使用=常に&よく;性別=両方)

たりない
たらない
たんない



と、高年層では「足らない」より、「足りない」が圧倒的に優勢である。ところが低年層では「足りない」が減少し、「足らない」が勢力をのばしつつあり、両語の勢力が伯仲している。

「足らない」と「足りない」は、ゆれ現象を示しているが、本来は四段活用動詞の「足る」であった。これが近世になって上二段活用動詞の「足りる」となって江戸で広まり、その結果、否定形の「足らない」と「足りない」が、ゆれ現象に入っている。変化の流れからいえば、「足りない」のほうに統一されるであろうことが予想されるけれど、予想に反して低年層で再び「足らない」の勢力が上向きになっている。

このように低年層で「足らない」の使用が上昇しかけているのは、地方からの人口の流入による影響ではないかと判断されるのである。

調査成果の中から、その一部を抽出してみたのであるが、「ゆれ」といっても、その内容はさまざまな言語現象が絡んでいることがわかった。ゆれの現象をつぶさに観察することによって、語と語の接触、世代間の語の交替、語の生成、語の廃棄など、推移する言語の諸側面をみることができよう。ゆれ現象の研究の中から、多くの言語学的知見が得られることはたしかである。

とくに、ゆれ現象が大きいのは、大都市言語の特性の一つと思われる。ゆれを観察することによって、関東の地において、一つの方言が大都市言語に成長し、標準語の地位を獲得し、さらに膨張していくその過程を考える糸口になりうると思われるのである。

ゆれ現象の研究は緒についたばかりであり、ゆれの中に、なお多くの言語学的諸問題がかくされているの

である。

ゆれ現象を解明するためには、何よりもまず、大都市東京を対象に諸側面から調査項目を選定し、一步一步、調査を積み重ねていかなければならないと考えている。そして調査対象を次第に地方都市へと広げて、その間にある異同も見極めなければならないであろう。

今回の二次にわたるゆれ調査は、これらの研究のための第一歩となるものである。その成果は、分析の進行をみて、一、二年のうちに出版の予定である。

この調査研究のデータの電子計算機の処理に関しては、荻野綱男氏と横川寿彦氏のご指導とご助力を仰いだ。

この研究を進めるにあたって、藤崎班の研究会において、柴田武、大塚明郎、藤崎博也、杉藤美代子、沢島政行、桐谷滋、馬瀬良雄、佐藤亮一、井上史雄、荻野綱男各氏の論議に負うところがあった。

この研究のために、ご協力をいただいた村上芙佐子・太田愛子・山本清隆・鈴木雄史・大島資生・木川行央・加藤和夫・中田敏夫・中田恵美子・大野ゆかり各氏、それに、いちいちお名前をあげることができないけれど、快く調査に協力して下さった多くの方々に対し、心から御礼を申し上げます。

(文責 中本正智)

参考文献

- 国立国語研究所「語形確定のための基礎調査」昭和30年
- 文化庁「言葉に関する問答集1～9」(「ことば」シリーズ)昭和50年～58年
- 国立国語研究所「大都市の言語生活」昭和56年